

主体的・対話的な学習を通して，歴史的事象に対する自分の考えをもつことができる児童の育成
～戦争単元を扱う学習を通して～



1 研究主題

主体的・対話的な学習を通して、歴史的事象に対する自分の考えをもつことができる児童の育成
～戦争単元を扱う学習を通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

令和の時代に入り、以前に増して、情報がよりたくさん飛び交う時代となった。平成の初期の人々は、新聞やテレビなどの媒体を主として情報を得ることが多かったという。だが今では、スマホやパソコンなどのインターネットを介して、様々な情報をより簡単に手に入れることができるようになった。令和2年初頭より現在も続く感染症拡大の中では、それまで以上に、インターネットから得る情報の重要性が増している。しかし、インターネットは、誰もが簡単に書き込めることから、根拠のない情報や間違った情報がたくさんあり、そのまま受け取ってしまうことは、その情報にとらわれたり、間違ったまま知識として得ていったりしてしまう危険性がある。簡単に大量の情報を得られるようになったからこそ、その情報を自分でよく考える必要があると感じる。

戦争に関しても、偏った知識やイメージだけで話が広がってしまう危険性がある。だからこそ、イメージではなく、戦争の題材を扱いながら、歴史的事象を学ぶ際に、戦争の暮らしを調べたり、聞いたり、話したりすることを通して、自分の考えをもてるように指導していきたい。また、戦争体験者が80歳以上で話が難しいことや、戦争を知る人がどんどん少なくなってきたことから、後世に伝えていく目的でも、戦争について詳しく学習し、自分なりの考えをもつ学習が必要なのではないかと考えた。情報化社会の課題に対応し、戦争という題材について共有していきたいと考え、本主題を設定した。

(2) 学習指導要領から

本実践は、学習指導要領第6学年の目標及び内容を受けて設定している。

『小学校学習指導要領解説 社会編』では、「思考力、判断力、表現力等」に関する目標として、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会の関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」とされている。また、「学びに向かう力、人間性等」に関する目標では、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う」「多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切に国を愛する心情、我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。」とされている。以上のことを踏まえ、本主題を設定した。

(3) 印教研社会科研究部の主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題を見出し、自らの考えを実現できる児童生徒の育成を目指して～

印教研社会科研究部研究主題にある「生きる力」を培うためには、その事象に対する理解を深め、自分の考えをもつことができることが基本にあると考える。それは、本主題のめざすところと合致するので、本主題を設定した。

(4) 先行研究から

- ・平成30年度 久保教諭実践【第6学年 戦争の学習における地域教材の活用】

久保教諭の実践では、2サイクルで単元が構成された。まずは、1サイクル目で広く、日本や外国の戦争の様子から国民生活の様子や様々な立場の人々の気持ちについて学ばせ、概要を理解させる。次いで2サイクル目で、「兵士」「銃後」「子供」の3つの観点から、身近な地域に引き付け、戦争中の佐倉の様子や人々の気持ちについて調べさせる。地域にある戦争に関する教材を活用することで、自分たちの身近な地域や人たちにも、戦争が関連していたことを理解させ、戦争と平和について自分事としての考えをもたせていく学習である。児童が地域との関わりを感じ、戦争を身近なものとしてとらえていく上でとても有効に感じた。

しかし、久保教諭の実践した学校と私の実践した学校では、佐倉に対する児童の意識や理解に格差がある。私の実践する学校では、佐倉に関する題材がほとんどないのが現状であった。そのため、久保教諭の実践内容を変更し、まずは、佐倉での戦争に関連することを知って、自分事として捉えるための素地をつくってから、世界に目を向けていく学習をし、その後もう一度佐倉市の戦争での暮らしを考えることで更に知識や考えに深まりがもてるだろうと感じた。

以上のように、本実践では、歴史学習と地域学習の関連性をもたせ、児童が自分事として物事を考えていくことを目的として、本主題を設定した。

(5) 児童の実態から

本校は、佐倉市立ではあるが、市の境付近にあり、佐倉の中心地よりも、八千代市や四街道市、千葉市の方が近く、児童が出かける場所を聞いても、八千代市や四街道市のショッピングセンターの方を利用する人が多いと感じる。また、アンケート（資料編1）にもある通り、佐倉について知っていることをあげても、「家が多い」「おばあちゃんが多い」などの学区周辺の様子を書く児童や、無回答の児童が多数見られた。だが、自分の身の回りのことを知りたいという意欲は強く、佐倉の偉人を扱った「佐倉学」の学習では、とても意欲的に学習に取り組むことができていた。そのため、自分の住んでいる佐倉の地域に目を向けさせることで、主体的な学習に繋がると考えた。佐倉であった戦争に関連する教材や当時の資料を調べることを通して、今までの歴史が残してきた佐倉の先人の思いや考えに触れることで、今の佐倉があるのは、これまでの人々のたゆまぬ努力によるものだという事に改めて気づかせたい。

また、アンケートの戦争に対するイメージから児童が戦争について考えていることは、戦争の道具や戦う人などの「戦いの様子」や「兵士」に関するものが多かった。児童の視線が、「兵士」や「戦いの様子」に向いてしまうと、自分事としてとらえることが難しくなる。そこで児童が使う教材を「銃後」「子ども」を中心にすることができれば、自分たちの住んでいる地域や、同じ年代の人も、戦争のために命懸けで暮らしていたことに気づき、戦時下の生活についての理解も深まると考えた。そして、自分の身近な所で戦争が起きていたことを知るために、「身近な地域」である佐倉に関する資料を提示し、その後、学習協力者の話を聞くことで、更に戦争についての気づきや関心が高まると考える、こうした学習を通して、自分の考えをもつことをねらいとして主題を設定している。

3 主題について

(1) 主体的・対話的な学習とは

主体的な学習とは、本実践での身近な地域の学習を通して、自分たちの住んでいた地域でどんなことが起きていたのかや、どんな生活をしていたのかについて更に考えようとすることである。また、「銃後」や「子ども」を調べることで、戦争自体の悲惨さを知り、そうなった原因を知ろうとする態度や意欲をもとうとすることであると考えた。対話的な学習とは、学習協力者に話を聞くことだけでなく、自分たちが戦争に対しての考えを伝えたり、戦争の学習を通して、疑問に思ったことを更に友達同士で考えたり、それを別の場面で発表したりすることで、自分の考えを深めることであると考えた。

(2) 自分の考えをもつとは

戦争は長い間日本では起きておらず、ほとんどの人が経験したことがない状況になっている。しかし、どんなに時間がたって、それが2度と起きないようにするために戦争の悲惨さをわすれてはならない。だが、働く教員や親世代はもちろん、祖父母世代ですら体験をしてはいない。だからこそ、戦争の背景や戦争時の人々の暮らしを知ったり、今の時代との違いを考えたり、戦争について詳しい人から話を聞いたりすることを通して、自分の考えをもつ必要があると感じた。そこで本実践では、戦争の学習を通して「自分の考えをもつ」ということについて、以下のような基準で段階を設けた。当時の暮らしや佐倉市の様子を通して、戦争についての考えを深め、その上で、今の自分の暮らしやできることについての考えをもてるよう学習を進めたい。

評価	内容	文例
S	その先を考える	～をつたえる。(周りにも生かせること)
A	具体的なことを考える	～していく(今後に生かせること)
B	抽象的でも自分の考えをもつ	～していく
C	根拠や理由はないが考えをもっている	～を知る。使える(知識)
D	考えをもっていない	記述なし

ここまでの児童
を目指す。(A)

(3) 「戦争単元」を扱う学習とは

東京書籍の教科書では、128ページから141ページの「長く続いた戦争と人々の暮らし」を戦争単元を扱う学習として行う。戦争単元は、自分たちの知らない部分が多くあり、どうしてもイメージが強い部分が多い。だが、どんな戦争であったかを、背景や人々の生活を通して理解することで、そのイメージが変わったり、深まったりしたときに、自分の考えに繋がるのが考えられる。自分の考えを持つときに、ある程度イメージがついてしまっている教材だからこそ、変容がしやすいと考え、本実践では戦争単元を扱って自分の考えをもつことを設定した。

4 教材について

(1) 戦争について

日本は、第1次世界大戦で戦勝国となり、欧米列強と肩を並べるまでに成長した。しかし、中国との満州事変から、国際連盟を脱退、孤立化し、日中戦争や太平洋戦争へと繋がりを、連合国と戦い、敗北し、連合国に占領・統治されるようになるまでの流れを理解していく。本単元では、戦争の中での人々の暮らしを学習していくことが主なねらいである。

日本は、1945年8月15日の終戦から、日本国憲法で平和主義を唱え、現在まで、他国との戦争を1度も行っていない。今では、戦争を身近に感じたことがある戦争体験者は、80～100歳の高齢者であり、母親や父親世代の人たちは、戦争を体験していない。児童は、戦争という言葉や意味は知っており、「してはいけない」ものであると理解している。ただ、今でも戦争の名残があることについて触れたり、その当時の人々の思いについて考えていくことは、これからも戦争を起こさないようにしていく上でも大切な学習である。だが、自分の周りでは起きていないことを身近に感じることは難しい。そのため、この戦争というものが自分が住んでいるところでもあったということやその当時の人々の思いに触れることを通して、自分の考えを深めることにつなげる必要がある。

(2) 学習協力者について

戦争の教材を扱うにあたり、今では様々な情報源があるため、教科書、資料集、本、インターネットなどを用いれば多くのことが調べられる。だがそれでは、その情報をそのまま受け取って終わってしまうことになる。だからこそ、戦争について詳しく知っている人を学習協力者として招き、そこで話をしたり、聞いたりすることが大切であろうと考えた。今回は、導入段階で、佐倉市広報課主催の平和祈念講和と映画会を行い、そこで佐倉市での戦争体験者の話や、実際に起きた空爆の朗読を聞いたりして、戦争についてもっと調べたいと意欲をもてるようにした。終末の段階では、戦争体験者ではなく、自分たちが調べてきたことを戦争について深く学んでいる方に話し、それを基に話を聞いた。地域学習の終末で、話をさせていただくことで、自分達が調べてきたことの深まりや、自分の考えをもちやすいと考えた。また学習協力者とも事前に打ち合わせを行い、自分たちの身近である佐倉市で実際にあったことを話していただくことで、身近で起きていた実感を高め、今の自分の考えを更に深めることができるのではないかと考えた。

5 研究の目標

第6学年の「長く続いた戦争と人々の暮らし」の単元において、自分の身近な地域も含めて戦争時の暮らしや事象について興味をもって調べ、児童同士や学習協力者と対話的な学習を通して自分の考えをもつことができる。

6 研究の内容と方法

ア 児童が戦争時の暮らしや事象に興味をもち、知識を深める指導法

／児童の変容の分析(振り返りシート・アンケートの記述)

イ 児童が対話的な学習を通して、自分の考えをもつ指導法

／児童の変容の分析(ワークシート・発表資料・振り返りシート・アンケートの記述)

7 研究仮説と手立て

【仮説1】

児童が身近に感じる教材を提示して学習を行うことで、戦争時の暮らしや事象に興味をもち、知識を深めることができるだろう。

手立て① 平和祈念講話と映画会による導入の工夫

児童がもっている戦争のイメージを鮮明にしたり、戦争を身近に感じ、自分事として捉え

るためには、直接人に話を聞いたり、映像を見たりすることが有効だと考える。そこで、佐倉市の広報課が主催している平和祈念講話と映画会を活用する。この学習を戦争単元の導入に置き、佐倉市に住む人の戦争体験者の話を聞いたり、当時の写真や資料を見たりすることで、自分たちが経験したことのない戦争を身近に感じ、今後の学習での目的意識が高まったり、調べたいことが明確になったりし、知識を深めることにつながるだろうと考えた。

手立て② 地域教材や具体物などの活用

平和祈念講話と映画会で使っていた戦争時の佐倉の資料や戦争中に使っていた道具を授業の中で活用し、教科書や資料集と照らし合わせて調べることで、日本全国で起きた戦争の様子も具体的に理解し、戦争に対しての自分の考えを深めることができるだろうと考えた。また、自分の身近な地域から情報を得ることで、「自分の地域をもっと調べたい。」「他にはどんなことがあったのだろう。」と興味をもつきっかけをつくることができると考えた。また、終末では、教科書や資料集などで学習した人々の暮らしについて、佐倉市の地域に残っている「銃後」と「子供」に関する資料や、実際に使っていたものを活用し、地域に関わる学習を取り入れることで、戦争に対する知識を更に深める機会であろうと考えた。

【仮説 2】

対話的な場面や発信する場面を通して、戦争について学習していくことで、自分の考えをもつことができるだろう。

手立て③ 学習協力者の活用

戦争については、自分のイメージのみから出た考えではなく、その当時の情勢や人々の思いを知った上で考えをもてるようにしていきたい。そのための手立てとして、学習協力者に話をしてもらい、戦争について更に深められるようにした。平和記念講話と映画会を導入として、佐倉や世界で起きた事象や人々の暮らしを学習した。学習したことをまとめる段階では、戦争について詳しく調べている方を招き、児童が戦争について調べたことをまとめた発表を聞いてもらい、助言をいただいたり、それを受けて更に詳しく佐倉の戦争について講話をしていただいたりすることで、自分の考えをさらに深めることができるだろうと考えた。

手立て④ 学習発表会での活動・保護者への発信

自分の考えをより深めていくためには、戦争について親と子が一緒に考えていけるよう場を設定することだと考えた。そこで、本校で毎年2月に開催されている学習発表会を活用し、戦争について調べたことや、自分たちが暮らしている地域の戦時中の人々の暮らしの様子、そして今の自分たちもそれを学び、考えたことなどについて発表した。そうすることで親と子で戦争についての情報や思いを共有したり、学習後にも戦争について家族で考えるきっかけを生んだりすることにも繋がり、自分の考えをさらに深めることができるだろうと考えた。

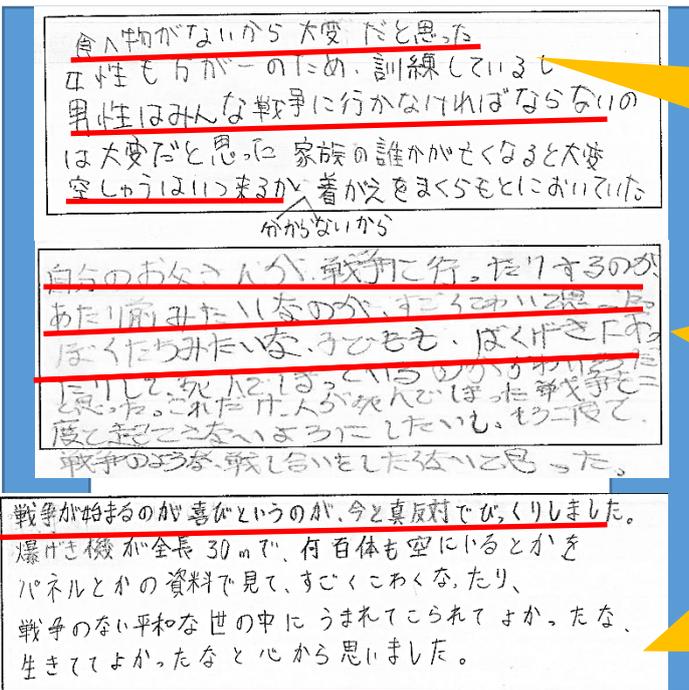
8 仮説の検証と授業の実際

【仮説 1】

手立て① 平和祈念講話と映画会による導入の工夫

導入で、平和祈念講話と映画会を行った。これによって、戦争に対してのイメージを児童が具体化することができ、「なぜ戦争がおきたのか」「戦争での被害はどれくらいなのか」「人々の暮らしはどうなっていったのか」など、戦争について知りたいこと、自分で調べてみたいと思うことを具体的にもつことができた。

平和記念講和と映画会での感想と意欲の変容

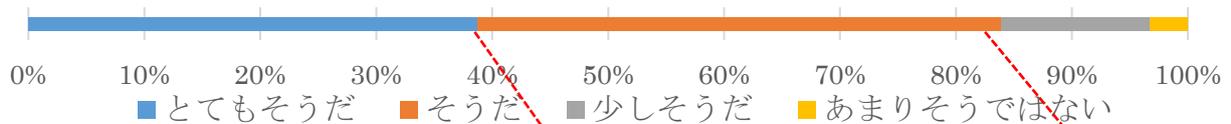


食べ物がなくて、男性が戦争に行かなければならないこと、空襲の備え
⇒大変だということの具体化。

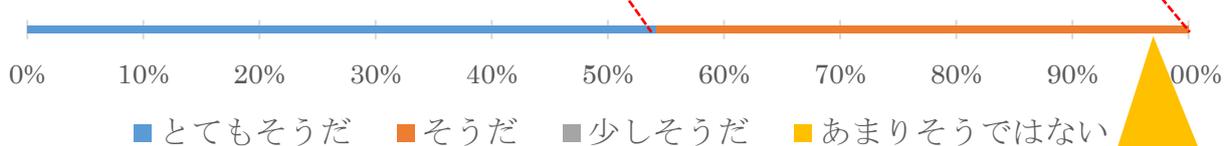
戦地に赴くことが当たり前であることの
こわさ、爆撃にたいしての共感。
⇒2度と起きてほしくない。

戦争に対してのイメージとは真逆（喜び）に
驚く。爆撃機の写真からのこわさ。
⇒平和の大切さを身に染みて感じている。

社会科の学習に進んで取り組んでいますか（事前）



社会科の学習に進んで取り組んでいますか（学習後）



どの内容も、自分のイメージとは違うところがあったり、身近に感じられる内容だったことから、戦争について知りたいことや調べたいことが明確になったからだと考えられる。

「すこしそうだ」「あまりそうではない」と回答する児童が0であった。

手立て② 地域教材や具体物などの活用

第1サイクルでは、ところどころで教師が補助的に解説を行ったり、当時使われていた道具を見せたりしながら、なるべく具体的に、身近に感じられるよう配慮しながら学習を進めるようにした。また、その戦時中の人々の暮らしに焦点をあてて調べ学習を行い、国民全員が戦争を第一と考えて生活していたことをまとめていった。最後に、戦争の名称・行動・被害・人々の暮らしの4つの観点で整理し、そのキーワードを活用して、わかったことや考えたことをまとめていった。

戦争時の人々のくらしの板書と 学習してきたことをまとめたワークシート

まとめ

国民は、軍が戦争に勝つために、食べ物も少ないうえに、国のために、小さい頃に働き、必要な物を補い、生活した（人々は、苦しいくらしをしていた）



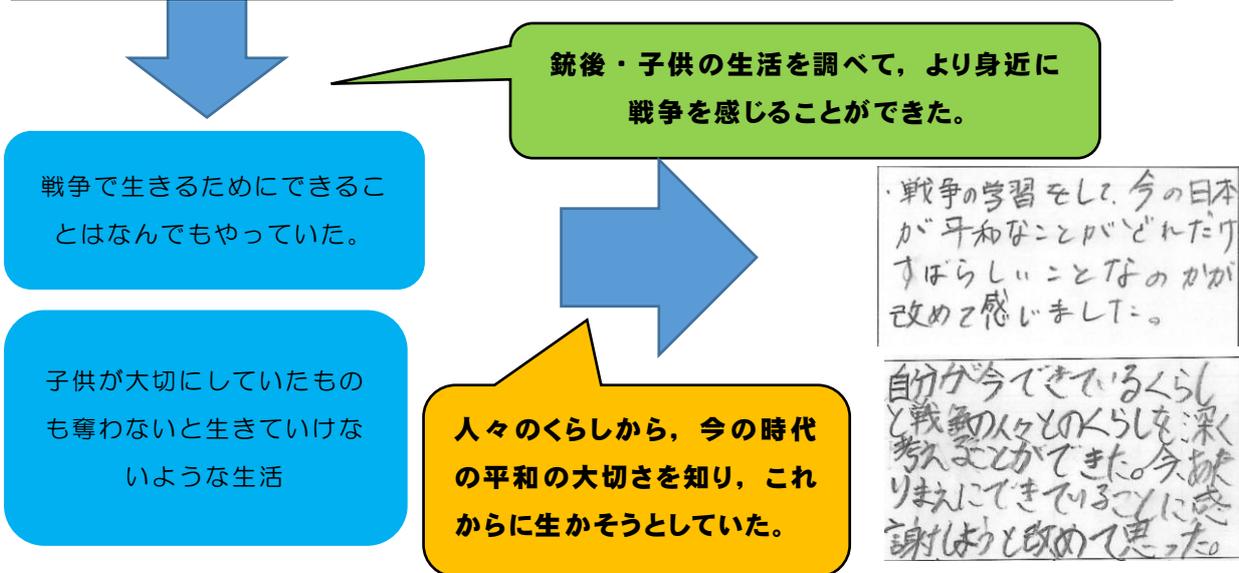
日本は、満州事変で満州を独力国とし、日本が支配した。国際連盟には認められず、撤退した。その時、ドイツがイタリアと軍事同盟を結び、第二次世界大戦がはじまった。そして、追いこまれた日本は、ポツダム宣言を談話し、敗れた。戦争のために、人々は自分たちの物が破壊復元でいっような物がなくなりましたが、戦争に勝つために、自分たちの物を補い、生活をしていた。

前時に扱った人々のくらしを活用し、日本の行動と人々のくらしを関連付けてまとめている。

第2サイクルでは、佐倉市に住んでいた人たちが残した資料や写真、教材を調べて学習を進めていった。銃後や子供の視点から、当時の暮らしを読み取ることで、今の自分たちに近い立場の人達が戦争にどう関わっていたか興味をもって調べられるようにした。興味をもって学習を進めてきたことで、学習してきたことの知識の深まりに繋がったと考えられる。

第2サイクル 佐倉市の資料や写真、教材を使った学習での児童の変容

佐倉市の銃後・子供の生活がわかる写真や資料を見て調べる。（資料編）



【仮説2】

手立て③ 学習協力者の活用

単元の導入では、戦争体験者の話を聞き、戦争についての関心をもてるようにした。実際に人から体験談を聞くことで、戦争について深く考えるきっかけとなった。

終末では、自分たちが学習してきたことをまとめて、戦争について詳しく知る学習協力者を招き、発表を聞いていただいた。間違った認識について指摘していただいたり、助言をいただいたりしたことで、更に学習内容を深めることができた。また、当時の佐倉についてさらに詳しく話をしてもらうことで、より具体的に戦争についてのイメージをもつことができ、自分の考えを深めることにつながった。

学習協力者への発表，助言，講話についての流れとその時の感想

1. 自分達が調べてきた戦争について、学習協力者に発表する。



「月火水金」ということについて発音してたんか
けどそれは休みがなかったのかなって思ってた
の日はあったらどうするんだって調べてる銃後は

発表したことがちがうことに気付けた。

2. 協力者に助言をいただく。

- ・間違いの指摘
- ・用語の詳しい説明
- ・質問への回答
- ・戦争について



3. 佐倉の戦争について講和をしてもらい、自分の身近な地域で起きていた戦争について考える。

内容

- ・佐倉市にある佐倉連隊について。
- ・佐倉市に住んでいた人たちの暮らし。
- ・戦争が続いていたら佐倉はどうなっていたか。

銃後…戦争に行っていない国民、慰労袋(手紙など)
戦争を支えていた、協力者あたりまえ
徴兵令→国民皆兵
学徒出陣→大学生(昔はとも少ない行かなくてよかった)
勤労動員→中学生以上(工場に行く) 沖縄は兵に
月火水金金の考え方
配給→みんな平等になるように、ないよりはマシ
石油→ないから足りたない 松根油
ごいし→日本 300万 (軍100万、国民200万)
空
城→基地(千葉の人→佐倉連隊に入る)
佐倉馬込
本土決戦→戦争がおわる少し前、海外の軍が
↑ 年 九十九里浜→佐倉
↑ 東京
子ども→少国民、国民学校
戦争やたら→非国民

用語を聞いたり、質問したりして、詳しくまとめた。

でも、現ざいと変わらないのは、
「みんなで協力することがあたりまえ、
ということでした。
協力は知ってるがぎり、人々か助けあ
でいる、ということです。
自分も人を助け合える関係、存続になりたい
と思いました

現在と比較して考え、なりたいたい自分を書き記している。

手立て④ 学習発表会での活動・保護者への発信

児童と保護者をつなぐものとして、2月に学習発表会を設定した。保護者自身が知らないことや、戦争について感じたことを児童に話すことで、自分の考えをより深まることができた。また、学習後には、国立歴史民俗博物館に実際に足を運び、戦争について更に詳しく学習してきている児童もいた。保護者に発信をすることで、親と子供でも話し合いができ、自分の考えをもつことに繋がっていった。

学習発表会で保護者の感想（内容については資料編参照）

<感じたこと>

平和の時代のありがたさ。子供と一緒に戦争について考えていこう。

普段の生活が幸せだということを家族で感じた。

<考えてほしいこと>

今の環境が当たり前でなく、自分の常識では通じないこと。分かり合う努力。

戦争によつての利点や欠点をよく考えること。

保護者への発信・感想から、児童が学習を振り返ることで、新たな視点や気づきになり、自分の考えが深まっていった。

事前アンケート～事後アンケートでの変容

最後に、今回定義した、「自分の考えをもつ」ことの児童の記述を評価基準と照らし合わせて、人数の変容を見ていく。（1人1人の児童の内容については資料編参照）

社会科（戦争）の学習をして、これから生かせることはどんなことですか。

評価・人数	事前	事後
S	1	4
A	3	20
B	6	7
C	8	0
D	13	0

それぞれの手立てを通して学習していったことによって、戦争を自分なりに受け止めて具体的に考えることができた児童が 4名から24名に増加した。

特にD評価であった、無回答やあると答えたが、具体的な記述がない児童が、A～S評価に変わった児童が 13名のうち11名いた。戦争の知識を深め、自分事としてとらえていったことによって、自身の生活とも結びつけて考えられたことがわかる。

歴史はなんのために学ぶと思いますか

評価・人数	事前	事後
S	2	8
A	1	6
B	12	8
C	15	9
D	1	0

加えて歴史学習の意義について、考えをもつ評価基準に合わせて人数を比較したところ、目的となる A 以上の評価の児童が 3 名から 14 名に増加した。特に「～を伝える」児童（S 評価）が 2 名から 8 名に増加した。

事前で、歴史学習は、「昔のことを知る」や無回答（C, D 評価）と答えていた児童 16 名の内、9 名が、「今・未来に役立てていこうとする」ことに変容した。C 評価でも、ただ知るというよりも、「～を知る」というようにより具体的な回答になっていた。戦争単元という 1 つを学習するだけでも、歴史を学ぶ意義が大きく変容するということがわかる。

9 研究の成果と課題

<成果>

- 導入を工夫したり、具体物を活用したりして、身近に感じる教材を提示して学習を行うことで、児童が戦争時の暮らしや事象に興味をもち、目的を明確にして意欲的に調べ、知識を深めることができた。
- 学習協力者や保護者との対話的な学習をとして、児童が戦争についての自分の考えをもつことができた。

<課題>

- 自分の考えをもつことができたが、後世に伝えていったり、平和を続けていくためにその気持ちを受け継ぐなどの未来までにつながるような考えをもつ児童を育成するための手立てを検討していく必要がある。

参考文献・児童が資料として使ったもの

- ・終戦 70 年平和祈念特別展「忘れ得ぬ記憶」～戦争と和田村～ 編集 和田公民館
- ・語り継ぐ記憶 平和祈念・戦争体験文集 佐倉市広報課